

新年おめでとうございます。

第5回日本中医学会学術総会は皆さまの多大なご協力をいただき、昨年9月12・13両日にわたって開催されました。大会のテーマは「中医学の継承と発展」でした。

中国には「十年植樹，百年育人」という言葉があります。樹木は10年かかって花が咲き実りを得られますが，人材の育成は百年かかるほどの大事であることを表しています。

新中国の成立以来，北京・上海をはじめ全国各省に中医薬大学が設立され，そこで養成された生徒が大勢輩出されてきました。しかし，これまでの中医教育に対しては賛否両論の評価があり，なかには臨床力のある中医師を十分に育てられなかったという意見もあります。近年，そうした問題を解決するために，大学教育と伝統的な師伝教育を合わせた教育が実施されています。さらに，大学院では修士・博士を養成する制度以外に，全国から40歳以上で，すでに主任医師資格を有し長年にわたる臨床経験をもつ者を対象に，統一試験に通った1,000人を選抜して優秀人材を養成するという計画が数年にわたって進行しています。その背景には，老中医の数が年々減少しているという危機感があり，2015年ではわずか1年の間に，7名の国医大師が亡くなりました。中国では老中医の経験をまとめ，継承することは，危急の課題となっているのです。

一方，日本では，ここ30年の間，中医学を学ぶ志のある者が雨後の筍のごとく続々と現れ，中医学関連の教材や翻訳書は数え切れないほど多くなりました。しかし現実を振り返ってみると，国から認可された中医薬大学はただの1カ所もありません。それでも臨床現場では漢方薬を使って患者さんを治療する機会は日ごとに増えています。洋の東西を問わず，医学では，教室で学んだ知識と実際の臨床での使い方は異なるものです。そのため日本の医師は，医学部を卒業した後，2年間，研修医を経験します。しかし漢方では，講義で学んだ後，その臨床を指導してもらう場所はほとんどないようです。西洋医学では1つの病気に対する検査・診断・治療方法・用薬にはおおよその基準がありますが，中医学では四診から病理機序の分析，さらに弁証を下すまで，すべてを医師個人の経験にもとづいて行います。最終的に医師なら漢方薬を処方することができますが，当然，そのレベルの差は非常に大きなものとなります。

いかにして教科書の知識を円滑に活用し，臨床の治療効果を向上させるか。この問題を解決するために，私は，当学会の勉強会「漢方応用講座」を任せてい

ただいて、昨年末で19回目となりました。この講座では、実際の症例を使って、病機分析、弁証結論、処方選択、さらに生薬1味1味の薬理作用および組み合わせの理由を詳しく説明してきました。それにヒントを得て、第5回学術総会では、それまでの学術総会のやり方とおもむきを変えて、実際臨床の弁証論治を主体に置きました。これは、中国でも、日本でも、中医学の継承と発展に向けて今後も続く重要なテーマとなるでしょう。

2016年1月
第5回日本中医学学会学術総会会頭
路京華